

塚本美和子

体臭

わたしは、母の生臭い体液に包まれ、この世に放たれた。
力強くこぶしを握り、欲するべきものは何ものかわかっていた。
みどり子は、乳の匂いと幸福な汗の匂いに包まれ
母の腕の中ですやすやと眠る。

どうかこの安らかさが続きますようにと祈ったのに

立って、移動することをおぼえたと、背には一升餅をのせられる
世界を広げることへの制限

なぜなら世界は幸福なものばかりとは限らないから

小さな台所で落としていた母の涙

教室に満ちる重苦しい空気と休み時間の嬌声

北アルプスの縦走路を抜ける爽やかな風と空の輝き

農家集落に淀む噂話や目くばせ

お弁当にと、そっと握るおにぎりから立ちのぼる湯気

かたわらに眠るほこりっぽい猫の柔らかな毛並み

病室からの消毒臭と早すぎる夕餉の配膳音

先に逝ったものたちの火葬の煙、そして墓前の菊の香

苦しみ、悲しみ、愛しみが

わたしの中に確実に堆積して、ゆっくりと熟成する。

それが、わたしの体臭を燻り出す。

産まれたときにはなかったものに

わたしは、完全に包まれてしまった。

わたしを包む何ものかが、もっともっと立ち現れる予感すら
包括する世界にひとり